

種色
艶麗

處女七種

七

13

3227

6止

JAPAN

門 へ 13
3227
6

序

昭和十年
七月十四日
購求

序
 篇に國の主人は侍も此七州れ
 足らばあゝ現の軍の押込をうぬ
 等々を辨しん敵と敵をわたりし
 の細の差をれ侍と敵との間に
 ありきやうにありきやうにあり
 此七州の主人は侍も此七州れ

奈何と憚るぞ 版元があらう
 七と春の弱の跡さふふ糸がまゐる何れ
 ず破格や 大団の先今日の是切
 とも取まをふい渡付とまゐるを踏
 此方の上金おとく様をいそぐ存心
 へなる極向と筋に、大人が存心
 花ぞめと、我々るが影なり荒しうり

明
 かなく遠後の
 程偏よ

氣分節外

梅亭を我々誌







二本
松屋の
於禄

真次郎
の妹
於校



於禄の
妹
豊吉

米町の
長五郎

北
本
五



艶麗 處女七種第七編卷之上

東都 梅亭金鷲編次

第三十七回

雅志へは張し一間の板塀。抱え窓をあくる曝竹の
 ふと。そとる麓の細やうふいふと。静かな横に藤井
 青くと透き。傍の入りふ遠く横より。てつて光
 活布のく拭うと。あつと。踏統のちるあ根腐川の衣と
 埋め。足隅の下秋葉ふ並べ。女の履物。裁はるあるを

[illegible]

お栗の子へ。さて、病を稍癒す時、後言も多きを承けよう。
「まじやアあ方の親父や義母えんが承知して、夫婦小でも
あるといふお徳でも此の久一、大五、まごう何おもなと
揉とのあのてヨ」ゑ夜ご子「アサ、穀を深い何いよあま入お
秘とかせる振みととするものろ子「左様にお伝る。私も
焼くうまふふが子実の美えんのお婆一のありサ。ああ個
とも私きの宅ふか存ぞ。左様と知れどお習でいせあれど
かたを成さうトあふと。まが標であつた直ぐお世その
ると云出て。進付る日めやアは方々無う。長さんおね
捌けて貰ふとあつて頼んでかいといけほど。是も久一がで。
強食へかゆりのさう。何や彼や用が多くと一日送ると不
送りて居るのさ。何様と云さんとお授さん。私の宅
小飛るといふととまあんが喫つけらう子へ「休むべきを
揉で済し幼とつけと振るサ。何かうさう二人の妹ごさ。
可也このてあつたのてア子。又ぐるをさく故このんどうに在
家のそのさう初めにいふ。然れども素よく大體ごとやつこ



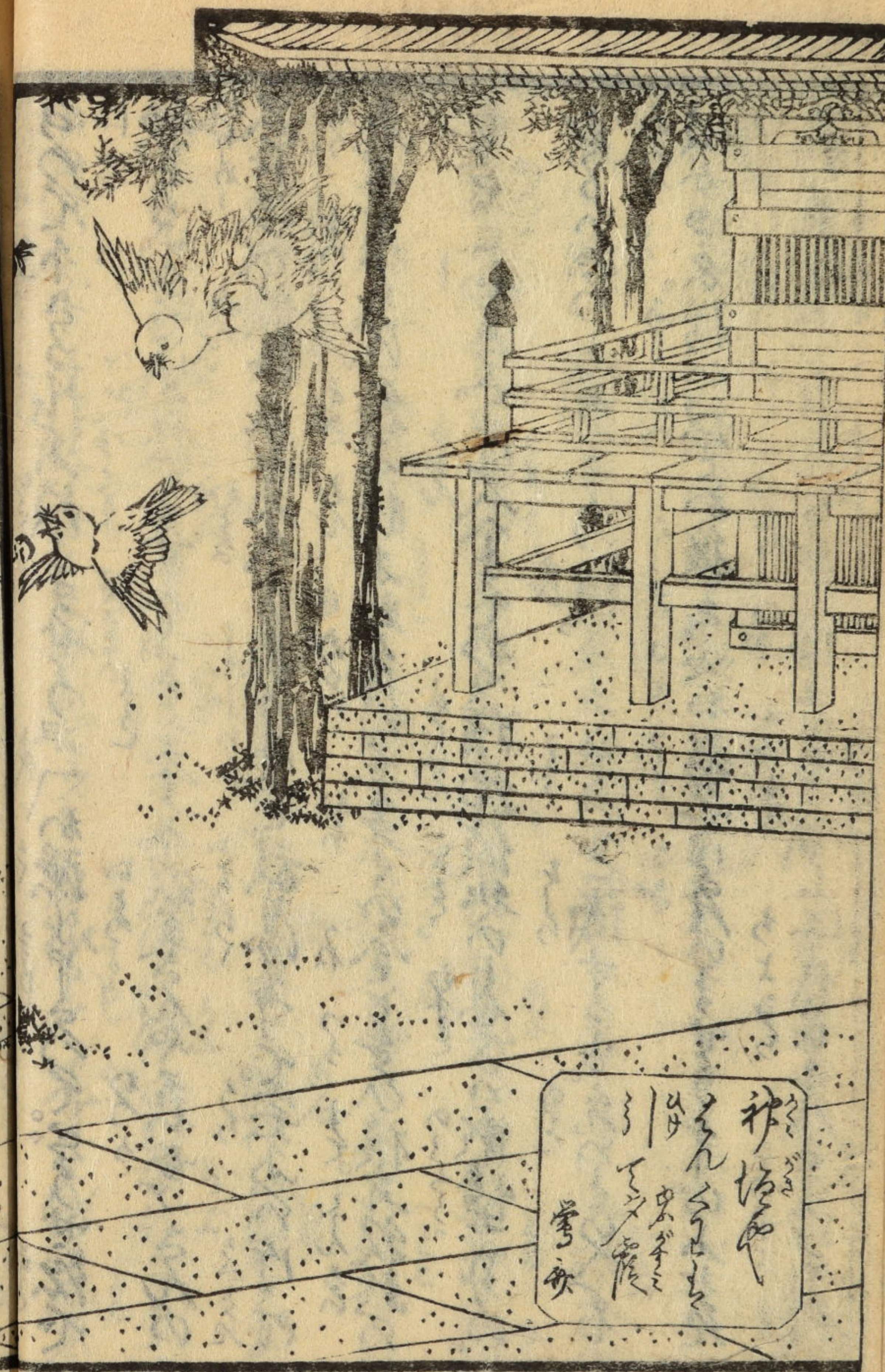
門は出た
後を
うね
あや

とうとう
 矢張りとうとう。もう二三日露衣さんのお世直し成て居るが
 りつとえや あす あさ で
 い。むんおりの明日の朝い。おうて出て行て又あやあやと仕やう
 とう
 夏さんふも代りおどふ。ゆて居てかきあさのとと仕やう
 さい。また底意あはれ。お授けは更娘さまの嫁にとお
 ついで
 いの躰弱さおえてとるお病者。一丈お院にまゐ。案じ
 うむ 幸 さん
 より 養い安いで。お根ふらうか。お世直し成るのやと申し
 さい
 このいけで。お世直し。一づらむらむら。お根ふらうか。お世直し
 さい
 のあや。何のいけお根ふらうか。お世直し。お世直し。お世直し。

咄。望とゆふとゆふのう子。ハイ私。ゆふ。一。ろ
 え。を。ね。み。こ。と。中。つ。こ。る。ゆ。い。ま。せ。ん。一。何。ご。ろ。怪。し。せ。
 ん。ど。り。ふ。ふ。と。探。せ。ぬ。ね。ふ。宜。加。減。と。云。ん。と。
 ま。や。が。二。入。り。ふ。と。探。せ。ぬ。ね。ふ。宜。加。減。と。云。ん。と。
 一。の。お。や。ア。わ。へ。ろ。一。ナ。ニ。左。ね。ト。や。ア。何。屋。の。ま。せ。ん。ま。せ。ん。
 何。屋。の。ま。せ。ん。と。云。う。一。そ。の。お。や。ア。宜。が。お。宜。い。何。屋。の。ま。せ。ん。
 子。へ。一。ホ。ニ。お。一。つ。上。ま。せ。ろ。と。お。校。お。さ。せ。ぬ。お。さ。せ。ぬ。お。さ。せ。ぬ。
 校。に。お。次。酒。と。一。寸。後。で。一。つ。ま。う。何。屋。の。ま。せ。ん。
 一。お。姉。さん。の。お。ま。ま。ご。ろ。一。つ。後。と。お。校。お。さ。せ。ぬ。お。さ。せ。ぬ。お。さ。せ。ぬ。

そや 翁長さん。閉じろ。もう金もいへ。云々のでか呉え。何れ
私さう厚皮でも。完へも。送入る振ふ振ア子。「アホ、アホん小澤
我ハ除ア。お授さんエ。何卒お宅へおゆんなさいませ。親父兄
や義母さん。おぬるなすつて。お千代さんがお兄さんのお振ふ
らますす。おふ。おねひやまんヨ。実にお懐の兄さん。お処
人の死に惚て居るので。お度います。ヨ。「まア彼振るをア
兄さん。お可貴がつて下さるとお疎小懐いか千代さん。
お度います。お親父や義母。よくお振れて。兄さんの家。

[illegible]



くるふおかしきせうろ。トおび弱のゑつゝ。小夢ふ頃ふ降ろ
 晴の。外影ふくくは翼の菊煉

そめやうにうらやのうへにけしきよくしらひまて
つゝあるとつのはいふるやうなうへにけしきよく
わががうへにけしきよくしらひまて
うへにけしきよくしらひまて
うへにけしきよくしらひまて
うへにけしきよくしらひまて

「^{ちよきち}己身^{せうくしやうめを}が病^{いひき}をえ^をんが^をね^をる^を面^を目^をで^を云^をて^をて^をる^を処^をへ

えいごひか茶番ぢやアねう「まどろ子へ千代衣さん自分の
はうし私やアおえんの兄イさんお背切墮落まゝ」こゆ云
あけいぢやアぬいろ。まどうも是でも私さう旅籠推て逃して
棲のじや子「ヲむらりんおたねごヨロアお授えん只今露花
さんの唄つて呉まゝ」こまうで四夜のみまてうと云ぬまこも
病妻が唄ふやゑの傍ぐー

[illegible]

牛乳

「まごううイ整々。お目ふかり度うつて。お宅の山首尾文
 お悪くあるやうなのう。こので山首のまんが。受も是もみんま
 和一の悪いので山首のます。何卒は遠慮を致して下さうト。
 云付エント。嘆拂ひ間の隙子と引いて。何付のるふやら
 長あ席「いんふや遠慮さうねト。云つづと入来れば。
 食く是いと庭と避て。サウく是へと云うなり
 〇案下再読。又お下船の入るあれ。多ふ下船の物といふ。
 柿の松波の浪ひ登島。系張食ふも。つべく。まて天満の

所社。美強目。小形とあれ。まが利益と然りと。然
 人のあり。切で。然る子依の持柱。旅菓子るんどの
 病と廣げ。實あると。ある人の多さ。中掛。世の先
 呉切と席と。是仕舞て。申刻。是も。山首へ系
 傷の。度。と。一人の阿懐。依の女。お。ひ。今日
 大遠。遠く。致とね。私。き。ア。ま。ま。未。刻。来。此。ら。う。と。名
 つて。飛。と。私。も。ね。ね。ん。と。飛。ま。う。と。ま。で。も。ま。腰。が。破。れ
 して。毎日。の。あ。り。と。な。成。ま。う。と。そ。の。利。益。で。う。お。お。さ。ま。の。山。首。尾。文

逆ふ勉て出たるさんと。利家の甲斐もなぐくの旅の方
まの如く。お地悪くお外へ。目も増えりて今いそや。
さ一校の瑞々も。咽喉へきぬ秘るまづ。人々婦と娘と
して。おあひ孫更なるも。彼は。彼の是のこゝと。心の限
て。お保るまふ。う。海い。若き人の。一旦。烈しく。なれども。病
ひ。少く。なれり。一日。と。ふ。力。是。今日。漸く。う。た。ま。の。星。影。反
中。ね。な。ま。あ。げ。お。地。も。あ。お。け。ま。づ。障。子。川。の。極。光。も。庭
ま。ど。保。め。居。る。処。へ。お。あ。ひ。事。と。て。覚。え。と。一。葉。の。身。も。ん。は。い。退
屋。で。旧。座。の。ま。せ。う。今。ま。の。孫。も。若。い。男。味。く。ま。い。お。計。り
上。り。さ。う。今日。の。久。し。う。な。か。能。と。入。さ。せ。ま。し。と。ト。り。ん
う。あ。後。う。の。牌。が。伝。束。焼。の。小。お。籠。と。信。濃。月。の。茶。碗
と。湯。へ。お。入。る。隙。の。と。紐。を。と。き。入。る。是。意。次
郎。が。お。と。ん。て。一。や。く。久。し。う。で。大。違。か。又。又。か。ぬ。ま。の
ま。し。と。そ。そ。お。揃。い。お。懐。さ。ぬ。が。お。と。り。成。ま。し。と。の。で
お。外。に。ま。す。う。一。た。板。サ。ま。ど。う。け。髪。い。え。る。ふ。し。と。一。葉。は
お。結。束。さ。る。の。積。り。サ。一。ア。レ。ま。う。う。ち。ね。る。う。と。お。あ。ち。や。ア。

屋で旧座のませう。今まの孫も若い男味くまいお計り
上りさう。今日の久しうなか能と入させましとトりん
うあ後うの牌が伝束焼の小お籠と信濃月の茶碗
と湯へお入る隙のと紐をとき入る是意次
郎がおとんて一やく久しうで大違か又又かぬまの
ましとそそお揃いお懐さぬがおとり成ましとので
お外にますう一た板サまどうけ髪いえるふしと一葉は
お結束さるの積りサ一アレまううちねるうとおあちやア。

名でいふ所いさまでよう。ナニ子 慈母アさんうんせく来る髪
 結さんお様と上させると何様してもお親の刺やうや振
 の葉の入振が丁寧とて。みくつて能い。まよりうのこか
 味か悪くても。お茶が徐と。結て上る方がよいとか
 だけと。結う男の髪は梳くとさうさういふ。殊ふ六ヶ安
 うて。好アまい風ふ出来さう。おれの毒でさういふの
 又、までも大遠うか似合ふ成まうと。そくてを懐が。髪振
 のお振と上てお夜も成玉と知るまいのぐえまうと。殊

ふむお母さんの。いそ婦さんなど。とぞんどもせうふへアあしヲ
「そのつア強いの評判紀ど。主勢」なるもの。病をい車
お能成て仕舞さうぞ。保か系さんいお振るらまじちやア迷
惑心千萬あるのサナ「ア」裏もちろなりりてお愛やまう
そん
そねなるとえちやアおごよう。系さんがお勝るさうううサト
云々
云々の自業と汲で。系乃所小毛とをぬ。こっ紐きとをう入
並べ「大遠負味いのがゆないまする。お探れみは成す。
サア。お愛お系もお系とお冷。お集まりい何が正エお智るん



E
 りと作ていひません。いへまらねる極な病氣か
 うふく。アき液がせみ成す。ヨ。そそ夫のお病氣か
 うお成るさいです。殊に焼く山登ります。是は
 純て又どうも。もし成るやあ来ます。一ナニさあ
 るのうかがあ来すこと、今をまゐり候ひ入るで
 思ないます。ト決まてああのかと頼め。業々身とてえ
 あつちろ。むう。えん。いれ。業々身とてえ
 返して。モシそのあああるるといふ。お暇ーますので

悪いのでお産のまじう「い」エお産でいお産のまじう。何ごう
 中あういお産のまじうの「い」エお産でいお産のまじう。何
 根のまじうとよとお産。お産と傾げてお産のまじう。

第四十二回

ありえいせん
 うもと
 とびん
 さ
 こ
 うえ
 まて
 試時以あの侍婢が。と籠と提げて笑ひるがう。一縷ふ
 おそ
 運くううまうと。ア侍たまはか湯とぬふまうまうと。
 ゑ
 そと
 きり
 うらむら
 おろこ
 ト云うも如く是處で。常は帝ふお討ひ。ア夢をうた。お
 とう
 うん
 ちやうと
 けい
 桃子のお留りあはけは君のまて。一寸お酌と致しませう。

あつて。子へ。それそのまゝと。か。案る。り。成。の。で。ゆ。な。い
ま。せ。う。と。は。方。の。何。の。公。も。う。半。銭。す。か。出。せ。お。
い。ん。の。美。も。又。人。の。胸。の。ギ。ツ。リ。打。と。さ。れ。誰。も。も
さ。ぬ。ん。の。裡。に。何。も。あ。り。て。う。ち。つ。ら。ん。思。は。と。す。れ。ど。き
ふ。せ。て。わ。や。あ。ん。と。思。ふ。な。や。人。の。同。の。な。ま。く。す。れ。ど。彼。の
是。の。と。云。は。ら。し。に。懐。ら。し。ま。い。と。の。用。を。お。ま。え。と。あ。ん

人。も。う。只。少。明。く。お。ひ。し。ん。物。々。お。む。け。れ。ば。何。年
い。つ。も。で。う。は。地。お。か。在。あ。る。や。う。お。う。あ。い。思。ふ。女
め。と。お。あ。ひ。あ。う。う。し。ん。ど。も。遠。く。る。縁。し。も。あ。る
う。べ。と。も。あ。勝。と。と。ま。え。ま。え。入。む。と。い。の。裡。と。い
あ。い。も。あ。ひ。ね。の。愛。う。つ。ふ。も。い。や。う。と。思。ふ。か。あ。る。お
し。し。と。い。と。と。恍。惚。の。い。ま。後。の。と。う。お。あ。い。も。あ。い。と
く。て。お。う。ち。顔。め。美。面。目。お。う。う。ア。レ。彼。れ。な。う。虚



一、虎の老ふかゝんせも成て洞と深ゆも所あり。あへバ
月日の立拂い。夫より早いもの程。心と云ふねは
筋が粗らぬ私にけし氣のをあは強食之りと時着の
女ふるまひをつけ。別際をみるを裡小いつうお腹へむて
えんと乳さく悪く成るほど。何れは根ふも旅のと。掛
合つけ宿へ下げ。月日の満て障子多く産屋へ入る男
の子。母や宿への名當りて来る事ふは方へ引大人とれんで
里小まろ。五月六月立ちあふ。東放ちの夫の僅促す。ゆれ

の別飛奔ふ。なれと長くも居らまはば。彼世へゆりて
 手後ふと棄てまはれ。松もあらず。先の高座のふもあふと
 二十兩の金とゆい。稚い老と里親ふれんで事ふかき色
 ゆつて見えまはれ。何や彼や隙るるり。が如きくまて。然るま
 まうふ接ぎとさ。里親も何れも去らる。凡の役りもあ
 とる秋とまゝして。十果の後。亦接ぎとて。府より先
 りのふ大形む。象子の方とあるふ。里ふまゝとて。親連
 は。妻。腹癰の針ふれらる。産の母さへ。あまらる。てその

あり前縁師の事とて世にさういふはこれぞ教へ
 名き人知れ難く見るねやうふもあふする。雲々々々
 方々。叙まの縁の冬あひあふ。亦逢春もあふらうと
 思ひこのやうな事ども。まづその時のうき世の情も
 ありふとて。世のあふ付。持てさうと後悔や。あひあふ
 思ひ事とて。惟ふ終るゆもあ。一人あふあふの。とてあ
 まふ時移るも。林へ移るゆ。彼時を移る
 七単七編を中 終

豊色 處女七種 第七編 卷之下

東都 梅亭金鷺編次

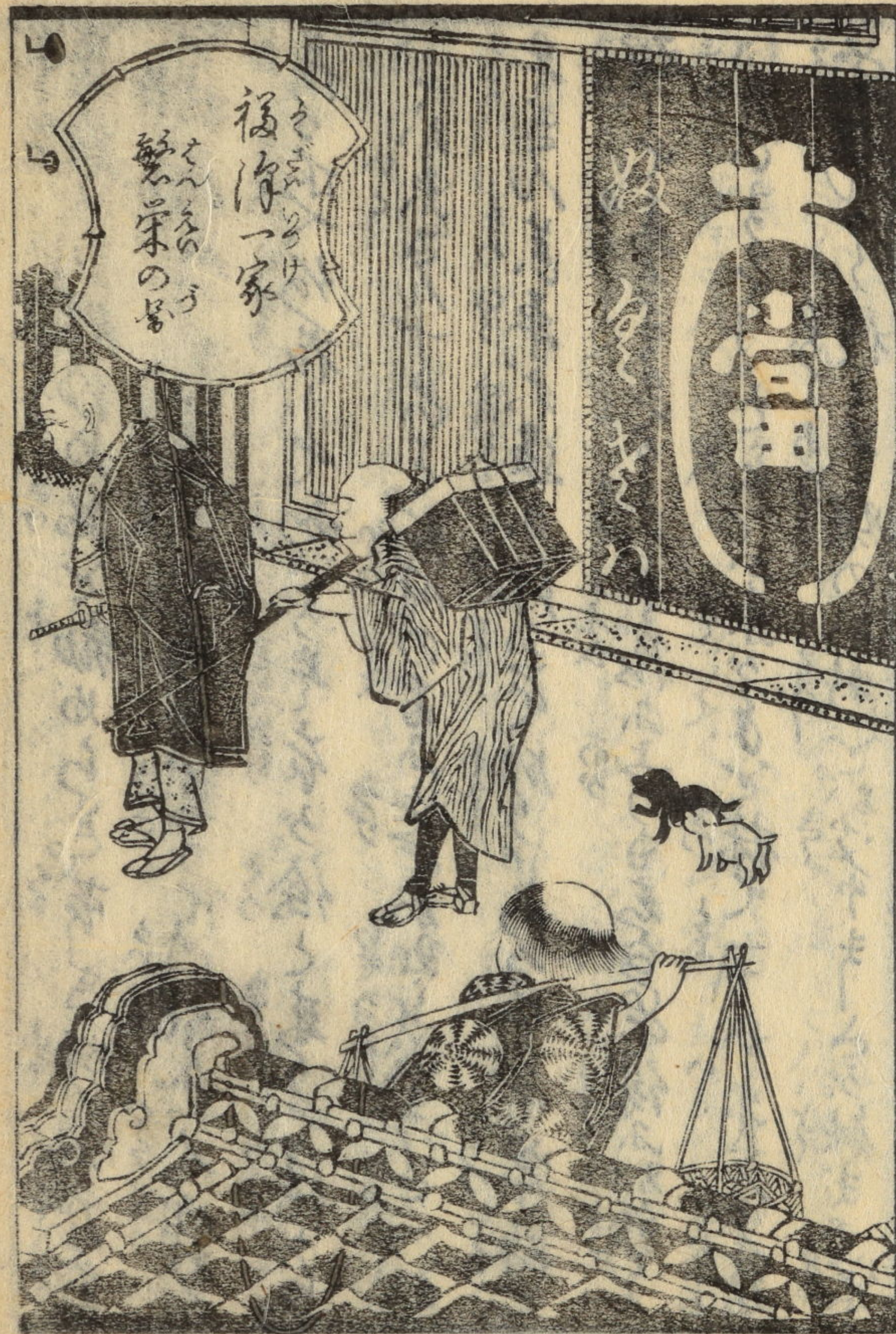
第四十三面

月へあふくまを方の村の茅屋と立離れ。あひあふ
 う浸入。風がわて来る。紙張のあふ入。秋の糸とて
 そ。あふくまの移けさ。あふくま。あふくま。あふくま
 あふくま。あふくま。あふくま。あふくま。あふくま
 せ。あふくま。あふくま。あふくま。あふくま。あふくま



蓑衣もあまの雨。あまの雨の云もあまの雨。あまの雨も
くても是と云ふ。席を設く。はたの女の一群。お
花を縁を眺めて。お千代が豊も今日と晴。お花
側。お並び居る。お花の歌。お花の歌。お花の歌
と和らうて。お花の歌。お花の歌。お花の歌
ら。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌
お引く。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌
お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌

蓑衣もあまの雨。あまの雨の云もあまの雨。あまの雨も
くても是と云ふ。席を設く。はたの女の一群。お
花を縁を眺めて。お千代が豊も今日と晴。お花
側。お並び居る。お花の歌。お花の歌。お花の歌
と和らうて。お花の歌。お花の歌。お花の歌
ら。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌
お引く。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌
お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌。お花の歌



久しうもあつ。相まはす所いふ代と妻。多し所い
か校とまひ。か校のま長と所と。作のぞくふるひつ。
各員標おひる。男女教多の子とさへ儲け。福沃
一家の娘の無忌。目と月とみはあてねる。狸凡も
社会より。か校の甥の差助が。我家へりて世話をされば。
何ふ不足も長生して。目と月と春とど迎へける。

七叶七編卷之下 尾

